柴北川プロジェクト通信　３２号

竹林整備と合同懇親会　平成２６年３月１、２日

柴北川プロジェクトの恒例行事の一つである竹林整備と合同懇親会が去る３月１，２日に開催されました。今回は、この模様を中心に、私・玉田がお届けします。といいつつも記憶に曖昧な部分が多々。そこで、共助研ホームページ「ゆきちゃんのマイページ」を参考に御報告させて頂きます（渡邊さん紙面にてご了承下さい）。

一日目(３月１日土曜日)　その１竹林整備

2月中旬、30年振りの大雪

豊後大野市の竹林は、先日（２月中旬）の大雪で大荒れ、各処で倒竹の傷跡。パッキーという倒竹音が夜通しあり不気味であったとのこと。前日、帰郷し実家(三重町)の裏山に入ると倒竹が広がっている。樹木の被害は少ないが、よくよくみると梅の小枝が花を咲かせたまま折れている。この傾向は長谷でも同じで、何故か竹と梅が雪に弱いように思われた。同市にとっては、３０年振りの大雪で、積雪は３０cm 以上、停電、断水も市内いたる所であったとのことです。

当日午後１時前には、集合場所である黒松生活改善センターに共助研の参加者全員（波木、木寺、矢ヶ部、金尾、山下及び玉田）が集合。早々に着替えを済ませ竹林整備の現地に向かう。現地に着き、渡邊さん宅の裏山に登ると、既に地元の方々が働いており、一帯に熱気がみなぎっている。その背後の竹林に目をやると、倒竹が凄い。これまで何度か整備してきた竹林であるが、未整備箇所の竹が前面に倒れ掛かっており、手の付けられない状況となっている。

竹林整備は中止、竹チップ堆肥と竹炭づくり

我々が近づくと、穴見会長と渡邊さんが、倒

竹が多く竹林の伐採、整備は危険なので中止したい。午前中に切り出して置いた伐採竹のチップ化と、昨年伐採した古竹の竹炭づくりを手伝って欲しいとのこと。竹林をみると右手側一角がきれい、午前中そこを中心に作業をやられたのであろう。既にかなりの伐り出しがある。空模様も気になるが、久振りの入山で意気込んでいただけに、突然の中止で拍子抜けする。今一度、倒竹林をみる。確かに伐採と同時に跳ね返りがありそう。どこに跳ね返るかも分からない。しかも大勢、安全第一で危険を回避した方が良さそうである。気分を変え竹粉砕機に向かう。

竹のチップ化は伐採した竹を枝落としすることなく、そのまま粉砕機に突っ込み・粉砕し竹チップとして放出する。粉砕機への送入を無理にやると機械が故障する恐れがあるのであろう、粉砕機は森林組合より借入しているが専属のオペレーター２名が付添う。我々は、次々と入れ込もうとするが、彼らはそれを冷静に抑制、制御する。それでも１時間もすると相当の量となる。午前中の分と合わせて３山ほどできている。しかし、実は、これからが大変。山積みした竹チップに鶏糞を混入し加湿。しばらく置くと発酵がはじまり、温度が８０度にも達す。そこで放水し攪拌する。それを数カ月から半年の期間、定期的に繰り返すことで初めて堆肥となる。粉砕機で竹チップは大量につくれるが、多ければ多いだけ、この後の手間が大変。その大変さを思うと申し訳ないような気にもなる。

一方、竹炭づくりは、「無煙炭化器」に古竹を投入して燃やし竹炭にする。これまでドラム缶を利用したり、簡易の炭焼き窯を作ったり幾つかの方法を試行錯誤。今では、竹炭の日常的な用途を考え、この方法を採用したと聞く。「無煙炭化器」という優れモノ・アイデア商品を利用しているが、要は竹を燃やし適度なところで水を掛けて鎮火、竹炭化。今日も皆さんとワイワイ焚き火を楽しみ、副産物としてのサツマイモ。竹チップの作業が一段落したところでコーヒーを頂きながら美味しい焼芋を賞味。大満足でした。

一日目その２．合同懇親会

３時過ぎには竹林整備は終了。我々は一旦、ホテルに帰りチェックインした上で再度、黒松生活改善センターに集合。会場に入るとテーブルが４つ、既に用意されており、料理が盛り沢山。美味しそうな川ガニも沢山ある。壇上には一升びんが十数本ならんでいる、差入れである。共助研の塚田さんからも差入れがあったと聞き、「すれ違いで御礼も言えず、申し訳ない」と波木事務局長。

午後６時になり、いよいよ開園と思いきや、その前に勉強会。「愛する会」穴見会長の挨拶につづき、木寺チームリーダーから昨年１１月に開催した

「若手研修会」の結果報告が少々。

手作りおかき持参で市長夫人も見えられている、ひと言挨拶を頂き、いよいよ開宴。愛する会との統合一本化が既に決まっている「長谷地域総合開発協議会」の田嶋会長より乾杯の音頭を頂き、開宴。各テーブル８～１０人で約４０人いただろうか盛大な懇親会であった。モクズガニの食べ方を教わり、昨年購入したチェーンソーの維持管理の仕方等を聞く。昔の農業、水田を想い起こし、長谷のこれからを語り合う。隣のテーブルでは愛する会と開発協議会の統合方法など熱心な討議。彼方此方でノミニケーションに花が咲く。ほろ酔い気分になったころ、矢ヶ部さんのギター演奏が始まる。木寺さんが加わり、三浦さん、渡邊さんがこれに加わる。しかし、各テーブルのノミニケーションは留まることがなく、夜遅くまで続いた。

挨拶する長谷開発協議会の田嶋会長(下右)と
柴北川を愛する会の穴見会長（下左）

二日目（３月２日/日曜日）

その３．アジサイ、いろは紅葉の植栽

昨夜二次会に繰り出した者も多かったようだが、午前９時には皆無事に旧長谷小学校に集合。天気は予想に反し良好、小春日和である。穴見会長の挨拶に続き渡邊さんの方から作業工程等の説明がある。「愛する会」では豊後大野市緑化推進協議会より苗木の無料配布を受け、２０１０年より柴北川流域で植栽を行ってきた。これまでは役員中心であったが、今年は我々共助研と一緒に実施したいとのこと。早々現地に赴き、山桜の第一、第二視点場である松巌寺傍の公園と成瀬谷にそれぞれアジサイを３０本づつ計６０本植栽し、山内の河川敷にいろは紅葉の苗木１０本を植栽した。

松巌寺の公園傍は急傾斜な法面の上、丸石を多く含んでいるため、穴掘りに少々手こずる。それでも４０分弱で終了。成瀬谷は以前田圃だったそうで粘土質。此方はスムーズに作業を終え、碑を囲み記念撮影。それから途中、梅林を見学して山内の河川敷に向かう。ここは個人の方が一人で桜の植栽を始めたところで、今ではソメイ吉野が２００本植わっている。昨年は、椿も植えたとのこと。道路脇には枝垂れ桜ならぬ枝垂れ梅が華麗な花を咲かせている。早速、１０本のいろはモミジを植える。この辺りの河岸は、数年前よりホタルが乱舞するようになったと地元の皆さん。

ここでも、作業は予定より早く終了。そこで栗ヶ畑で鳥獣対策として防御ネットを張ったとのことで、その視察に出掛ける。野球場何個分の広さであろうか、立派な防御ネットが段々畑(水田)を取り囲んでいる。個々で対応するより効果的で、景観的にも農村風景を壊さず、良さそうではある。ただ、最終評価は草が繁殖する夏場など一年間を通してみなければとのこと。その効果はともかく、地域の皆さんで協力して色々なことに挑戦しているところに、長谷の地

域力が高まっていることを感じる。この辺りの川でもホタルをみるようになったと言う。今は梅が咲いている、春には山桜が満開となる。小春日和の中、心地よい時を過ごす。

その４．会議＆昼食

豊後大野市からの協力要請―ユネスコ認定の「エコパーク」と食のモデル地域育成事業―

植栽を終え黒松生活改善センターに帰ると昼食の前に少々会議とのこと。席に着くと豊後大野市の堀さん（企画総務課）が紹介され、市としての企画提案を説明された。市はジオパークの指定を受けたが、さらに現在、県及び竹田、佐伯市と協力して祖母傾山系「エコパーク」の認定を目指している。エコパークはユネスコが認定する生物圏保存地域のことで、自然と人間社会の共生を目的とし、登録申請には生物多様性の保存の「核心地域」と教育研究やツーリズムなどの場となる「緩衝地域」、それと人が居住する「移行地域」の３つのゾーン設定が必要。前２者の核心･緩衝地域は祖母傾山系の自然生態等から必然的に決まるが、問題は移行地域の設定らしい。そこでエコパークにふさわしい自然と人の共生の候補地域を探している模様。同時に市は、農林産物のブランド産地の確立と６次産業化に向けた商品開発を目的とした「食のモデル地域育成事業」に取組んでいる。どうやら長谷地域の活動実績等を踏まえて、これらのモデル地域になって欲しいとの要請らしい(一部、豊後大野市ホームページを参考に補足)。

メダカとドジョウの棲息する昭和の郷づくり

昨日の懇親会で話し合ったことでもあるが、我々が子供の頃の田圃にはドジョウやメダカがいた。裏作には麦や蓮華が植えられていた。堀さんも言及されたように完全な無農薬農業は厳しい。しかし、ホタルは復活しつつある。花いっぱい運動も広がってきた。僕の実家周辺では望むことは無理だが、長谷では子供のころの原風景をみられそうな気がする。豊後高田が昭和の街づくりを進めているが、別に真似する訳ではない。長谷の人は、皆さん親切でやさしい。強い絆もある。村が元気だったころ、昭和の村づくり、郷づくりを進めたらどうだろう。広島県の尾道市御調町ではゲンゴロウが棲息する米づくりとして「源五郎米」が産地化、と報じられているが、産地化が目的ではなく、里山づくりの結果としてブランド化が生まれたようである。長谷には、その可能性が芽生えているように思えてならない。こう言うと今日も、地元の皆さん､「そういった意見が既にいろいろ出ているよ！」と笑い顔で応えてくれた。

この２日間を終えて、長谷開発との統合一体化がそうさせるのか、個人的には、何か山が動きそうな予感を感じた二日間でした。

会議を終え、昼食は柴北レディースの手作りカレー、その美味さにお代わり。少々食べ過ぎました。今回もお土産にミカンとお芋を沢山頂き、恐縮しながらも大満足で帰路に着きました。